

ミオヤの光 三昧の巻

| | | | |
|----------|----|----------|----|
| 身心の統一と目的 | 一 | 所求 | 一八 |
| 三昧の目的実現 | 二 | 去行 | 一九 |
| 摂法 | 三 | 本願 | 二〇 |
| 三昧感応 | 三 | 人格の核 | 二一 |
| 三昧練習 | 五 | 回向発願 | 二二 |
| 觀念總合 | 五 | 信 | 二三 |
| 主我と客我の總合 | 六 | 心行の形式内容 | 二五 |
| 三昧統一 | 七 | 選撰本願の王 | 二六 |
| 意志 | 七 | 本有無作の報身 | 二七 |
| 住神一境 | 八 | 大經の法藏因位 | 三〇 |
| 見佛の心理状態 | 九 | 三身説 | 三二 |
| 名号 | 一 | 三徳 | 三七 |
| 至誠心 | 二 | 付録辨榮上人慈訓 | 三九 |
| 三昧發得 | 一六 | 會報 | 五二 |
| 所帰 | 一七 | | |

身心の統一と目的

精神は身體の内性にて身體は精神の表現である。此身心は統一的にして歸する處の目的あり。身體に就いても身には種々の生活機體の團體である。神經作用消化作用循環作用排泄作用等の機能を以て組織する。此の作用は系統的統一的に目的ある如くにして唯々器械的に働くにあらずして法身が此身を活す所の理目的ある如くに觀らる。此種々の機體構造が無意義に連合するに非ずして機關悉く生理的統一關係に非ざるは無し。各部の機能も各自的あり。例へば目を構成する諸成分の統一聯絡ある歸する所は物を觀るを以て目的となす。一切の神經乃至一切の生理機能の各團體なる統一的の身體は一切の生活機能を構成する同一目的を目的とす。各個々の生命もまた大なる目的によりて統一せらる。身體の各個々の機體は各自己の作用は別なるも相互に影響を及ぼす如くに一切の個體を構成する人類相互の間にもまたお互に影響交渉す。

一

有機的生理機能は生命持續を目的として活動するも此活動は意識的なるを要せず無意識的に衝動して消化循環等も自動的に循環して呼吸するなり。

然るに意志は能動的に自覺的目的の觀念に向つて選擇批判欲求し目的を實現するなり。

三昧の目的實現

人の生活には消化循環呼吸作用の如く無意識的に生命保存の目的を營んでゐる。

また高等なる意識作用になつては精神の作用を統一して目的を實現せんとする作用あり。

三昧による擇法は精神意志は其要求する如來を見ずに他の種々雑多の念が雜起す。其を排除して其目的に向つて進行して目的を實現せんと欲して努力す。目的に集注する時は觀念聯合には緊張状態に他念が發現するも其勢力を壓して要求の目的に達せんとす。種々の雜念にかゝるが故に意志は障礙せらる。之を一所に制し注集選擇精進の力を發揮して其目的を實現せんと欲す。

擇法

雑多の念より選ばれたる目的觀念を實現せんとする意志の勢力益努力意志如來の靈應を實現せんと目的に精神を統一して活動して、此如來と云ふ一定の對象に凝神する注集する心的内容は漸次に明了に現はるゝは注意なり。此注意を妨ぐるは妄念、この妄想を制止し一心一向に努力し、心々相續して念念するの一心金剛の如く、此目的を實現せんと欲するに其結果として豫想が實現するに於ては満足の快感生ず。若反對に目的を遂行する能はず豫想を實現せざるが如きは不快の感なき能はず。

三昧感應

三

目的たる三昧即ち見佛の目的を實現せんとする精進力、この要求は宗教心に主體と客體との關係にて唯自己の精神のみが客體の靈應に充たさるゝ處にかゝる満足を得。然りまだ宗教に入らざる人は其儘にて不滿なきも一度宗教心の如來の靈に滿さるゝ時は缺陷を自覺する時は敢て靈に滿たされんとの缺乏を感ず。若し闇夜に電燈を一度用うる時は燈光の要を感ずる如く、人の靈性は靈の力に滿ちざる時は不滿なりと感ず故に要求努力は宗教的意識の完成を期す。

現在我は闇黒である。靈の光を要求す。また現在我の生命は有限である。永恒に生きんとする要求が起る。此靈的光明と永恒の生命とは宗教的關係の目的なり。主體なる我と大なる如來の心靈と融合し此大心靈の流は過去際より又未來際まで永恒に不變大生命の源なり。同一大光明大生命の中の一切の個々なれば一切の衆生は同一の本によりて永却を盡して流れ來り常恒に互に感應して交渉す。此一大目的は一切の心靈を攝して常に靈の活氣を興へ、相互に交感靈應して、大光明と大生命とを個々の身によりて實現す。

三 味 修 練

人の精神活動は内心に喘ぎ外界に奔湧して須臾も休止することなく種々雑多の念慮に忙殺さる。如來に合一せんとする三昧目的觀念に向つて努力し、他の反對勢力を排して一定目的に如來を獲得合一せんとするは、初心には甚だ困難なり。此の百難を排して一定の目的に注意凝神し金剛心に克己沈着眞面目勇氣を以て精神修練を要す。

觀 念 聯 合

人は已に經驗したる過去の事實を接續的に再現する性あり。富士山と云へば雪を觀念しました阿彌陀佛と光明を聯念し或極樂を觀念する如く、是觀念聯續の復現なり。觀念感覺聯合あり。

また純然たる觀念に聯發せられて聯合作用と成ることあり。例へば三昧喧想して佛の相好淨土の莊嚴等を想像する時明瞭にして外界の事物を目標するよりも尙分明なることあり。

主我と客我との聯合

主我は經驗の自己、客我は經驗せらるゝ對象としての經驗、主我は意識の自己にして其自身の身體を認識す。主我は一致の觀念に過去刹那々々生滅變化するも過去現在を一貫して唯一不二の實體常恒の存立實在を主我とす。主我の存在を自覺するが故に對象たる客體にも亦主我存在を認定す。一方は主我、對象を對我とし、觀念集注する時聯合作用現はる。觀念集注の内容如何。

吾人が生理的に食物を攝取するに營養分を身體に入れて生理機能によりて自己身體に同化す、對症感應も同理なり。對者と自己類化應同す。

三 味 統 一

雜念。人の意識は種々の雜念亂起して同一觀念を把住することは容易にあらず。意馬心猿外塵に動せられ内心に喝き劇波停め難し。種々雑多なる社會の刺激に襲はれたる習慣甚だ除き難く紛々と雜慮雜起し想像記憶等の念繁瑣に往來す。宗教の精神修練の要は雜念雜亂を驅除して純一無雜の思念を精練するにあり。明鏡止水無想無念の境に安住するにあり。一心專念自己の妄念滅却する所に如來は顯現す。如來の靈月を感せんには自己心水坦然たらざるべからず。

意 志

三昧の修行には意志の精練を要す。精神の力は意志にあり、意志の力強ければ感情及びすべての念慮を制す。妄念を轉じて目的に向ひまたは滅止しまた抑制する等目的

に向つて專心に強制するも、激情は活動劇しく或は烈しく熾るかと思へば忽ちに消ゆ一定の選擇せる目的に向つて進み他の雜念を排却するは意志の力なり。念佛三昧は雜多の念慮を排して専ら如來に歸へす。純正目的は如來の中に入り如來の光明獲得する所にあり。

三昧には自己を虚無にするにあり。雜亂なる意識を滅却して純一なる即ち如來の靈に充滿せしめんために意識を滅却すと云ふも、それは從來の妄なる我を滅却するは如來の靈光に滿され靈に活きん爲にして、靈若し如來の靈に滿さるゝ時は靈的活氣全身に彌漫す。

住神一境

念佛三昧は但觀念にあらずして専ら所念の如來を純一專注し心念統一專念に所念の彌陀を專念し目的を遂行せんとの心念なり。漸々に純熟するに隨つて精練されたる觀念は白日青天一點の片雲なく靈月麗天靈妙の活動自己精神生命は全く如來の中に投じ益遂玄に如來我にあり我如來にあり。古人が月や我我や月やとわかぬまで心にすめる秋の夜の月とは此の三昧の心理の消息を洩せるなり。

見佛の心的狀態

念佛三昧の所期は見佛にあり。されば二祖上人は別時念佛を行するに見佛を期せざるは功を成し難しとの意を以て示されし。此に就いて見佛の心理的状態を云何に心得て豫期せん。見佛と云はゞ幼稚なる者の觀念には見佛は若三昧發得せば肉眼に對して玲瓏たる皎月雲の間より顯れたるを目撃する如くならん哉と。或は心眼にても自己の心眼に對して客體に全く向ふに現はれたるを自己の心眼に反映すること肉眼の如くなる。此に就いて暫く自己の經驗に本づき説明せば、世界の相対的なる靈界の絶對的なるとの區別を知らざるべからず。肉眼の感覺は相対的にして自己の肉眼と所對

の物色との關係によりて視ることを得。例へば人の眼あり太陽ありて視ゆる。如來は自然界の太陽の如くに相対的關係にあらず、絶對の心靈界に待すれば吾人の心靈は同體の分現なる自己の心靈なれば如來大心海中の自己の靈波なれば、自己の根底大心海より自己の心靈に實現するのである。故に自己の絶對根底より自己に現じ、それが反映して相待界の肉眼に對する太陽の如くに目前に現するを見る。絶對には實には彼此の別なく大小の分なし。其絶對大心靈界の方面なる如來心海より現じたる靈象は現じたるが反映して彼こに見ゆ。自己の心靈より起つて全く遙に旭陽赫々として光を放つ如くに彼こに現す。相好圓滿にして光明徹照す。彼此の相なき絶對の大靈よりまた彼此の相に現す。然れども相待の日光と自己の眼との因縁關係によりて現するとは反對なり。日光は彼こより自己の眼に反映して視る。相好莊嚴は絶對より自己の内的靈性に發現せるを彼の空界に投映して之を視る。其靈象光明の赫耀たる徹照せる象また肉眼對象の物色の及ぶ所にあらず。

絶對如來心より衆生心中に現したる如來相好及び妙色莊嚴なるが故に、觀經に如來是法界身、入一切衆生心想中と、光明大師の讚に、彌陀身心徧法界。映現衆生心想中是故勸汝常觀察云々と。

名 號

111

名は體を徴す。名體不離の眞理を聞いて體得すれば名號萬德總持の彌陀の聖種子。種子に本有と新薰あり。本有種子は佛性、衆生法爾として具す。新薰は名言種子業種子八識中に伏在して自體果を生ずる能力あり。色心萬法を現象する生産の起元作用なる力。例へば植物の種子に生産する起元作用ある如く、生物の元形質が種子の細胞に入りて種子と爲り一切の枝葉根莖等が依め込み式に伏在して縁を待つて漸次に發展顯現する如く、其聖種子が頓て靈的人格の元素となる。諸佛の萬德は此聖種より發展して圓滿に成熟したる靈德に外ならず。

一切佛法は悉く佛陀の心靈より咲き出したる枝葉花である。妙法蓮華も大方廣雜華の花も乃至一切大乘の法は如來菩提樹の枝葉に咲ける花に外ならぬ。佛の一切萬德總括の佛種子は名號に伏在す。故に宗祖が佛種子の名號に存する事を悟り一切佛教中の枝葉と花とを捨て、衆生の爲に佛種子の名號を撰みだり。之が薰發して衆生の信念に受精する時に之が靈格の核と爲る。

至 誠 心

宗教關係の客體の法を衆生の至誠心に薰發す。言ひ換れば如來の靈精を衆生の心靈に受けて信念の胚娠となる。靈性にあらざれば聖靈の精分を受くるに勝えず。

心の二面
至誠——佛性——靈性——道心——聖靈性——(正善源)
虛假——煩惱——肉性——人心——動物性——(罪惡源)

又三性分別して靈性を顯示すれば、一、天性は動物共通性、本能、意識的虛假なし
二、理性は人の特殊性、自己の動物性を制止する能はず虛假をなす。三、靈性は神人共通なり。

往生の易き所以は、靈我本能に伏能する故に、本如來藏心を根底とするが故に如來

111

心に歸入すること易し。然るに肉我は覺に背き妄に順ふ故に肉我に順する時は淨土に生じ難きなり。

至誠心の本體は生佛一如の心源、即ち法身如來藏心なり。衆生本佛性伏藏す。然るに唯人性と動物性とのみ開發して未だ靈性開けざる時は人間の理性が動物性の煩惱に順ふが故に名利の爲めに虛假心と爲る。若し靈性に順ふ時は眞實心となる。

眞實心は本源の自性一たび迷ふて煩惱の他郷に出づ。世に順へば生死に流轉し佛に隨ふ時は永生に復活す。

至誠心は靈性を根底とす。若し至誠心は即ち靈性の形式體にして之には内容を要す。

至 心

信(知力)——至心に如來の靈應を信受して如來を我が有とするは信
愛(感情)——至心に如來を愛樂して親密入我我入の融合を爲すは宗教中
心眞隨なる愛なり。
欲(意志)——如來の永生に入り永遠の生命と生れ如來の聖意を意として
益向上し下一切を度するの意は欲望にあり。

靈性は至誠心なり斯の至心にのみ如來の聖種なる靈精を信受することを得。精子を至心の靈性に受容す。此が宗教心の元素と爲りて永く佛性永遠の頓て佛果の自體を爲す。

衆生信心淳熟し難きは虛假妄想の自ら至誠の藥を覆ふて靈的精種を信受することなきが故なり。或は人間の理性亦是動物性の爲に孤疑を抱き却つて本然の至心を閉づ。自己の罪惡深重なるを懺悔し至心に信する時は靈精忽ちに感發す。即ち受精して胚娠す。信は益如來の恩寵を仰ぎ。愛は感情的に母子的の關係に靈體を増長し、意志は願作佛心又示生の欲望なり。

一切の虛偽妄想等の非眞理を脱却するは至誠心の消極的方面にして、信と愛と欲とを以て彌陀の靈應と合一し融合し靈化して形を見れば法然房質は阿彌陀如來の應現な

114

115

りとの人格現は即ち積極的方面なり。

信心の金剛石に如來の日光を感受し彌陀の光明は祖の信念に反映す。感情は彌陀の慈愛と融合し彌陀の慈悲即ち祖の慈悲現と爲る。願作欲生の意志に對して彌陀の聖意は祖の人格と現す。是れ至誠心の充實したるものなり。

信——一仰信、二解信、三證信

至誠心愛——一母子的、二同様の、三大小二我合一的

欲——一願作佛心、二父子合意、三願度生心

三昧發得

發得、又業事成辨、又信心開發、光明獲得、又見性、又大悟、又佛知見開示、等〇種々の表稱あれども要する所信仰開發の兆候なり。喩へば植物を栽培して花開かん如し。是れ教權文字の造化に非ずして永遠生命ある果實を來す心靈の花開きしなり。二祖曰く、念佛成就不成就以三昧發得。現身念佛成就者見佛云々。

三昧證體を所期とす——二祖。證得の證——群疑論。

啓示の三種形式は一感覺的、二寫象的、三理想的

所 歸

神三位

一實體——絕對無規定——起信の心真如の體——絕對法身

二宗義學の神——一切諸佛神明中獨尊統攝歸趣の客體——報身

三心行の所歸の神——安心起行の本尊——選擇本願成就の客體——應身

一切諸佛慈悲の體、衆生を救ひ攝取せんが爲に人格現の尊、法藏酬因感果の彌陀世界因果に墮せる衆生の爲に因即果滿の身を現して十方諸佛に最勝の依正二報を現して衆生に應じ

一六

所 求

終局目的の歸處、佛教終局は通じて涅槃。

實體は絶待にて佛身佛土本來不二、是れ終局の歸所。

天然の人は世界依屬。然るに世界は苦空無常無我。一切衆生惑業の感する所世界は相待即ち因縁に規定せられ生滅變化流轉究りなし。畢竟の依所に非ず。絶待に依止すべき處に非ず。如來の依止する所大涅槃界生死を超絶したる處之終局の歸所なり。

涅槃即無量壽國。經曰く、國如泥洹、而無等雙。又曰く、次於無爲泥洹之道と。泥洹とは諸佛如來の安住する所最終の歸所なり。導師云く、極樂は無爲涅槃界と。論に曰く、第一義妙境界相無爲清淨

無量壽國、無量光明土、常寂光土、智慧土、極樂、淨土、蓮華藏界、密嚴國土、神國等は皆此の涅槃界の異名なり。

去 行

通じて云はゞ真如より迷ひ出で六道の迷郷に出で、生死に流轉する是衆生は惑と業より生れ來れり。去つて真如の本國に行く。即ち迷界より真如に去る處の行業を去行と云ふ。

如來に二種身あり。實相身と爲物身。實相身は真如の當體、爲物身は實相より用を起して顯現す。即ち真如より衆生の爲に人格現なるを如來と云ふ。真如より顯はれ來るの謂なり。

真如に去り行くの行業に信と念とあり。

信とは所歸の佛を信愛し所求の佛國に生れん事を欲望し乃至十念の行なり。

信には愛と欲とを兼ね、念に定と慧とを具するの行業即ち念佛三昧なり。

念は始終にて信佛の心を以て念々佛を念する時は必ず相應す。之を三昧即ち定と云

一八

一七

一九

ふ既に三昧を得れば佛の身土を觀、佛心を見る。之を慧と云ふ。即ち佛心と相應する時は佛我心と爲る。我佛心と爲る時は即ち佛子である。佛子なる時は其三、佛子佛心佛行となる。

十念は佛心と相應する始終の故に階級あり、三とす。

念佛を開く時は五正行と爲る。

本願

本願の形而上論——如の終局目的

衆生は世界因果に規定せられて生死に流轉す。如來目的は因縁相待生死を解いて涅槃に歸せしむるにあり。

本願の體は法身、般若、解脱、

本願の力は太陽の光熱化の三線に例す、

本願の目に攝法身、攝衆生、攝國土、

本願の正因又生因は第十八願

生因は第十八願の三心、生業は乃至一形の念佛業

生因生果は全生活全人格の核と爲るべきものとす。因果に通じて靈的人格を形成する行業。

至誠は人格の核となる。至誠に如來の聖靈を感受し、眞實の自己、如來の聖子たるの自我、此の自我靈我は現在を通じて永遠の生命とし、乃至佛果に至るの人格の核なり。

人格の核

人格の中心眞髓は那邊に存在するや。性具十界、事造十界。とて本來十界の性能善惡邪正迷悟苦樂を具有して因縁と事業が十界を造作形成す。

本來人に本有と新薰とあり。本有は十界何れにも爲り得るも新薰が十界の中に一種の特殊性を形成するに至る。名言種子等の薰習が人格の核を形成するなり。

靈的元形質は阿彌陀の名號を聞いて自己信仰の元形質種子と成る。若しは人天若しは聲聞、若しは緣覺、若しは菩薩、若しは日蓮主義、若しは基督主義の聞薰が心靈の元形質と爲りて其主義の人格を形成す。

大經序分の釋尊が即ち往昔の法藏十劫正覺の近現、唐の善導、吾朝の法然等の代々の血脈遺傳して靈的遺傳が今日の吾人に至るなり。

回向發願

宗教心理の研究によれば回向發願は意志の信仰である、故に回向發願の眞意義は從來の迷妄我の意志を一轉して如來の聖子たるの靈的意志に化生するにあり。回向に自己の意志そのもの、轉向に非ずして臨時の事業の功德を回らす此善根を振り向けて淨土に往生せんが爲と云ふ如きも回向の分なきに非ず。されども善は枝葉にして根元的意向に非ず。眞實の回向は自己の全人格の意向を一轉する處にあり。

六道迷没の衆生の生得の意向は善縁に遇へば善意と爲り惡縁に隨へば惡意と成り、忙々たる六道定性なく、因縁に隨つて轉變す。故に凡夫の意志は輕毛の如くに隨縁に變し易くまだ一定したる人格意志なきを不定聚と云ふ。人格の核と爲るの種性未だ定らざる不定意志の甚だ迷妄なることを自覺し、自己の靈性が彌陀の種性に薰發せられて從來の不定意志の轉向して全く自己が彌陀の種性たることを自覺して、感情に於ても肉我の罪惡なるを嫌ひ靈我たらん事を欣び、人格の中心たる意志が肉我より回轉して靈我に意向を決定したるを位不退又正定聚と云ふ。意向不退、自己往生の自覺、感情が如來の中に安住して如何なる縁にも退轉せず。

信

信は知力の信仰是宗教生命の核となるべき聖種が形成するの種子なり。信に三位、

聞——仰信

思——解信

修——證信

古人云く我天下老和尚の舌頭を疑はず是先聖古佛の所説と。例せば三經の依正莊嚴の如きは教祖自ら經驗の境相を啓示し玉ふもの、かゝる説を聞いて自分の經驗と同一に歸す爰に於て自ら證明して疑を容るなし。之仰信なり。

有る人云はく、自ら信心已に復活する時は塑像畫像も全く活ける聖靈體と信知せらる。是は眞佛に非ず塑像又畫像なるのみと認むる如きは未だ自己の靈が復活せざるが故に斯く感ずるのみ。

(靈活是榮が常套語)

心行の形式と内容

爰に一の鑄像の模塑形あり。一の型式にて鑄たるも鑄像の材質は金銀銅鉛等の差あり。其如く同じく安心起行の形式は祖に則るも、實行の功果として宗教的人格の内容實質を形成する上には或は純金なるあり又銅鉛等の離交の鑄成たるあり。

我等宗祖に學ぶ處心行の形式全く宗祖の模塑に則るべきは勿論なれども宗教的人格を構成するの内容實質に於ては完全ならん事を祈る。非金又メッキの如き又純金に充實せる如く全精神の八億の念々常恒如來の靈に充たさるゝ、如きは靈的人格の實質に充實したるものとす。

貪瞋邪偽、奸詐百端、事蛇蝎の如くなる材料を以て云何に佛陀の實質を成さんと欲するも竟に不可得。楞嚴に謂はゆる、砂を蒸して飯を造らんと欲するも得べからざる如しと。宗祖の靈格を構成せんには常恒に彌陀を念じて休まず。縦令口に佛を稱する

も心常に佛心と相應せざれば能はず。

選擇本願の王

佛敎の如く佛身佛土無量難多に説ける宗教にては諸佛中に特に別願成就の佛を要す又淨土を要す。

一切諸佛の中別願成就の佛身佛土を撰み、一々誓願爲衆生なり。攝法身是衆生を子とし如來は父とし父の光明と壽命と諸佛稱揚との諸佛超勝の法身は是諸佛の父とし一切衆生を攝取開化する大日輪なり。攝衆生としては父が一切の聖子等が六根より乃至一切身分に法王子の功德を具備せしむ。攝國土願としては依報は莊嚴淨土の徳を衆に與施す。是父が王子等が爲に財産を讓與するなり。

* * * * *

本有無作の報身

三身の説に就いては宗々其見解を異にして佛敎中未だ一定したる説なし。然るに佛敎に實相論あり緣起論あり。聖道主義(哲學)淨土主義(宗教)あり。其宗教意識の立脚地が各別の故に客體なる如來三身説も同一ならず。若し聖道(哲學)と淨土(宗教)との立脚地を異にする處を陳れば、聖道門は因果的の關係を以て現在の衆生と當來の佛陀とを區別し關係する時間的の關係。乙は空間の關係である。暫く聖道門にて因果の關係とは衆生初發心菩提心を發して菩薩の願行を起し、若しは長時に若しは短時に初發心より一生補處に至る階位を菩薩の五位とす。既に因圓果滿を佛果とす。因地に自己の發心と自己の行爲が自己の佛果を成就するにあり。斯の因果的の規定に就いては宗派によつて同じからず。

淨土敎は宗教にして(因緣)即ち主體と客體との關係にあり。如來の光明と衆生の信

念との關係なり。光明また恩寵とも云ふべし。人の信念を攝護し同化し給ふの義。信念とは如來の恩寵を信受し靈に活きんとの義。喩へば太陽の光熱化の力によりて地上の生物が養成せるゝ如く、また太陽の能力には生物を養成するの功用あり。如來の光明には威神と慈悲と智慧との三靈力ありて人の知力と感情と意志とを靈育し給ふ。衆生の信するが故に如來光明を獲得し念するが故に信心を増長す。

斯の如く衆生の信念を因とし如來の大光明を増上縁として衆生心を長養す。斯の如き因縁によつて成立する宗教に於ては必ずしも聖道門の如く因果的の規定を要せぬ。

宗教の客體たる如來は必ずしも酬因感果の佛陀救濟的の對象を要せぬ。若し如來が全く六度萬行の因に報ひて其の結果たる因果律より成立したる如來が吾人に對して因果の規定に依らずして救濟の果を得らるべき理なし。云ひ換ゆれば彌陀が菩薩萬行の因を積みおきし故に吾らが果滿の佛と成り得らるゝと云ふことは古來より疑はるゝ、他作自受の難を免れぬ。本來絶對者の法則には二回に行はれてゐる。一回は天則に依つて自然界に行はれてゐる萬法は一切の生物に對して因果的ならぬはない。心靈界の方面は統一的合目的の理性は有るけれども自然界の生物の如くの因果律が行はれ居るとは思はれぬ。抑も報身の光明界即ち涅槃常樂界なるものは因果律に器械的に建造したるものにあらず。

絶對大靈界には重々無盡の靈德具備して其内容は眞善微妙にして有らゆる萬善萬美の極致である。其中心本尊の神尊は一切眞理の本源一大靈力の原動にして因果の法則より成立したるものに非ず。其大主權者は一切法則の本源一切因果律の基本とは爲り得ると云へども中心本尊が因果律によりて成立したるものとは考へられぬ。

絶對者は心靈界の方に攝取するは即ち是合目的である。絶對者が天則に依りて因果法則によりて器械的世界の方面に一切衆生を生成するは吾人が現に生れ居る自然界である。此生物の生成には因果律によりて爲る。然れども宗教の目的とする處の精神的に絶對界に闖入せんには絶對者の聖意とも名づくべき謂はゆる終局目的の理性に

隨はざるべからず。吾人が永遠の生命と絶對靈に合致せんには相待因果法に依らずして絶對の終局目的に依屬せざるべからず。

絶對なる大權威者が衆生の因果律に依りて成佛したるものとは考へられぬ。また絶對界は因果法に依りて成立したる結果とも考へられぬ。絶對者の終局目的の勢力に隨順して初めて吾人は如來に攝取し同化せらるべし。吾人が一心念佛三昧に依りて絶對威靈者大慈愛者と合致することを得らる。此合致したる大靈界の如來は因果法から成就された靈格とは考へられぬ。矢張り本有無作の報身と信せざるをえぬ。

大經の法藏因位

彌陀無量光は一切諸佛の本佛にして絶對者であり極樂とは實は無爲泥洹即ち諸佛安住し給ふ大涅槃界の異名に外ならぬ。古來達者は悉く説く彌陀は諸佛の本體諸佛は彌陀の分身と。極樂とは涅槃界涅槃界即ち無量壽佛土と。是佛教中最進化したる説なり。また藕益師の如くは彌陀は本覺諸佛は始覺諸佛始めて絶對の本覺の無量光彌陀と面前に接す此時を正覺とす。

是の如きの絶對靈界自然常恒涅槃界の四徳の莊嚴は實には本覺の靈妙界が顯現なり。是の如きの靈境は本有無作なれども衆生無明に翳せられて之を見ることができぬ。こゝに於て本覺の如來より此土の衆生の爲に終局目的の界に攝取せんが爲に法藏菩薩は此地上に來れり。

法藏菩薩が世自在王佛の二百一十億諸佛の妙土の纏妙善惡を觀見して、我が建立する處の淨土を奇妙第一ならしめんと云ふも、是れまた本より絶對の靈妙界は一切の世界に超勝したること無論なれども、凡夫の心は此娑婆の種々の待比的の習慣に執して居る衆生をして満足の意を興へんが爲の善巧方便のみ。さればとて法藏菩薩の説が全く方便假設の説と謂ふこと勿れ。所以いかに。眞に絶對威靈者は方便假設の神に非ず永恒に活ける實在者に在す。斯く大威靈者在まし無比莊嚴の淨土は存在すれども、若

し方便法身たる聖者が世に出でまして世の法に順して衆生攝化の道を設くるにあらざれば、衆生は大威靈者の許に歸還することが出来ぬ。法藏菩薩は大威靈者の一の化現である。

法藏菩薩と云ふは古代の神話であると云ふ人あらう。けれどもいかに思ふも其は其の人に任ずる。例へば天照の神全く國の祖先の子と云ふことは實は古代の神話であると云ふ如く、任汝。天照の神が國の祖先の子と云ふは神話であらうとも今現に六合に照り互つてゐる太陽を取消すことはできぬ法薩比丘が神話だからとて今現に吾人が仰ぎつゝある絶待の大威靈者を否定することはできぬ。

三 身 說

若し聖道家の説によれば法華文句に三身の華梵を擧げて

一法身毘盧遮那如來、法は可規に名づく諸佛之に軌て成得す。法を以て身とす故に法身と名づく。梵語は毘盧遮那、華に徧一切處と言ふ。眞如平等性相常然身土無礙を以ての故なり。如來とは金剛經に云く、從來する所なし亦去る所無し故に如來と名づく是なり。

二報身盧舍那如來一因を修して報を感ず。之を名づけて報と爲す。然して自報と他報との別あり。自報とは即ち理智如々にして他報は即ち相好無盡なり。是を報身と名づく梵語の盧舍那、華に淨滿と言ふ、謂く諸惑淨盡衆德悉圓なり。又光明徧照と云ふ謂く内智光を以て眞法界を照す外身光を以て大機を照應す。如來とは轉法輪(經)に云ふ第一義諦を如と名づけ正覺を來と名づく是なり。

三應身、釋迦牟尼如來、智と體と冥に能く大用を起して隨機普現し説法利生す。故に應身と名づく。梵語は釋迦牟尼、華に能仁寂默と言ふ。寂默の故に生死に住せず能仁の故に涅槃に住せず、如來とは成實論に云く如實の道に乗じて來つて正覺を成すと、是なり。

聖道の哲學的根據と淨土教の宗教的根據とにては實は三身の說に於ても大に其特色を異にせざるべからず。

淨土教の如き全く宗教的の教に於ては宗教主體なる衆生と客體なる彌陀との區別と關係に於て他の聖道家とは立脚地を異にしてゐる。聖道家にて自己を本位とし自己の心性を研くに就いて古佛の教を仰ぐまでの佛陀と、全く自己の全部を投歸して彌陀の靈力に依つて復活するを目的とする教とは大に趣きを異にす。然るに從來宗教的なると哲學的なるとの區別を明瞭に判せざるため、淨土教の攝化主彌陀尊と衆生との關係を聖道家のそれと同一轍を以て判してをる。實は根本的誤である。三身共に聖道家とは大に立場を異にしてをらねばならぬ。又從來の佛教は一神教汎神教超在一神の汎神教との三教に區別する時所有る佛教中眞宗のみ他のすべてに超えて宗教的の性質を帯びて一神教を以て立つてをる。是東洋中に有らゆる佛教が一般の民間に(以下斷絶)

法身は云何に觀すべきまた報身は云何に觀すべきとなれば、法身と報身の方面を、人の精神と身體、物と心とは本一體の兩面なので、精神と身體、物質と心質と各全く獨立の實在にあらず。感覺の現象界として物自體にあらず。内觀念も本體ではない。何れも一の現象に過ぎず。物質と精神は同一の本體である。感覺的の客觀的觀念を物質と云ひ、内的觀念の非物質非空間觀念行はるゝを精神と云ひ、内的觀念には感覺概念思考判斷意志等の活躍して働く方面にて、外的觀念に在つては物質エネルギー等の時間及び空間等の種々の物質的の變遷交渉として現はる。精神界と物質界の相対的なく純正一元にて精神界と物質界は一體の兩面觀に過ぎず。此兩面を分擔して研究するが哲學と科學である。一方の物質的空間的器械的説明と因果律的に行はるゝ、萬物を研究するが自然科學の任務である。無機と有機との論なく物質的の感覺界は自然科學器械的の説明即ち因果律的である。天地萬物外部より觀れば悉く自然的物質的器械的因果律に支配せらるゝもの、因果律と云ふ。一方の目的とは精神的概念及び意識に依つて

自覚したる全く主観的の者なので目的には手段あり。主観的概念系統あり。人間の目的的行為を見るに一定の目的表象動機となりて之を繼起するに幾多の精神作用が續出して竟に其目的を實現せしむ。若し宗教的に云はゞ如來を觀んと欲して一心に専ら念を繼起する時は其目的の如くに如來の實在を信するに至る。之を客觀的物質的に解析すれば、目的表象なるものは大脳生理作用に相當し、繼いで神經系統及び筋肉に一定の生理作用が喚起されて運動を起し外物に作用する繼起に相當する客觀に觀察すれば物質的因果律となる。

法身は天則的萬法の一大本體、自然界の萬物が規則正しく運行し謂ゆる四時行はれ百物生ず天則に自然界に行はるゝ因果法によつて生成す。此の秩序の統一的根源を法身とす。天地萬物は悉く因縁因果の法を以て行はる空間には因と縁と相互に關係し例へば天體の太陽系が太陽を中心として數多の惑星が相互に因縁相關し空間的に相互の關係は網の如くに連り、時間的は因には必ず結果あり、因果相關して鎖の如くに連り過去の過去際より未來際にまで因果相連つて繼起す。

三 德

如來には衆生を迷の中より攝め取りて如來自性光明の中に攝めて如來の聖意に合はざる衆生の垢質を脱却して清淨無垢の眞性を顯はして萬德を以て莊嚴せる佛とは成し給ふに如來より衆生に對する靈德に三あり之を三德とす、曰く法身と般若と解脱なり。

通佛教には諸佛は自ら法性の理に契ふ軌則に則り法身の德が顯れて成佛し玉へり。此眞法性の眞理を諸佛は身となし玉ふ。此法身の理體は諸佛に在つても増さず衆生に在つても減せず、衆生は迷うて顛倒して法身の清淨の體が顯はれず、諸佛は悟つて白日青天の如く其法身の體が顯はる。本覺清淨の大靈體は常に易はらざれども迷ふ時は

闇夜の如くに自性法身の體が隠れて居る諸佛は白晝大虛の如くに法身の體が顯はる。法身の德を宗教的に云はゞ、衆生一心に念佛して南無の一心を彌陀本覺の中に歸命して、全く我は亡して唯絶對大光明中に冥合する時は、吾我の心は亡して彌陀清淨法身の德のみ顯現す。若し爰に至る時は自ら諸佛正覺を成して法身顯現したると同一に歸す。

般若の德、般若は智慧なり。諸法の不生不滅、清淨無相、平等不二、不増不減を覺了する智慧なり。諸佛が智慧の明る時に本覺清淨の體が照見し一切の眞理を了々と覺了す。

今宗教的に表せば、衆生彌陀の大光明に照らされ一切萬法も悉く彌陀光明中の有なれば萬法悉く我有と覺り得らる。(以下斷絶)

辨榮上人様の私への御慈訓 (承前)

辨 隆

〔(前略)此頃は我専修念佛の流の水源なる鎮西筑紫の善導寺の内佛道場にありて、日本續藏經のあり、之を開き讀みて、側ら聖影をうつしなどして目を送り、てうど北海の濱に釣をたれて、武王てふ魚をまつヂイさんと同じ様なるものである。(後略)〕

此御書面は其後大正十年三月祖山の御別時に九州大谷仙界上人様の追想談の節御話しの善導寺に永く御滞在被遊ても、唯一人として御尋ね申しても、御言葉が確にわからず、光明主義が何だか知れぬ中の事とて、折角東國より、筑紫の國まで參りても、海の濱に釣をたれて、魚をまつヂイさんと同じ様なと仰せられし事とあの時思ひ出し拜察し奉りし次第であります。之は多分九州へ御出に相成りてより凡そ二ヶ月も過ぎてよりの御尊書かと存じます。夫れより後に頂きし御歌に、

大ミオヤは子らををさめて泥沍の

みやこにすくふみむねなりけり

子をおもふミオヤの聖旨本よりも

かゝりあるとはかつて知らじな

大ミオヤの終局の目的にかなはずば

人の身うけし甲斐やあるべき

子をおもふミオヤのみむね知りたくば

なむあみだ佛のこゝろとはなれ

かの國をはるけきほどゝおもひにき

ミオヤのみむね知らぬむかしは

常世なる無爲のみやこはおこそかに

眞善美妙のきはみなりけり

死してのちゆくみちにてはあらざらん

生死はなれし無爲のみやこは

親と子の心にへだてなき時は

いづ處も無爲のみやこなりけり

けはしくも忍ぶの山路越へぬれば

いと安らけき道にいづらめ

わたつみもくみつくすとのいさましき

心に得たるまにの玉かな

手も足も断れてもなほ安らかに

忍びしみあとならほしものよ

火にやかれ鎚にうたれてくろがねも

世にめづらしきつるぎとはなれ

ふしゝもまた骨々も解かれても

安く忍びてひじりとはなれ

みちのくの忍ぶの山路さかしくも

なるればやすくのぼり越すらん

すゑつひにかちどきあぐるものゝふは

忍ぶの鎧きればなりけり

眞心に此處もかしこもなかりけり

十方世界只一つにて

みほとけを念ふ心が目に見へば

さながらたつとき佛なるらん

三の身と分ちて御名は聞きしかど

たゞみひとりのミオヤなりけり

かぎりなき三世の佛のかすゝは

ひとりのおやの異名とはしれ

釋迦藥師地藏彌勒といふものゝ

ひとりミオヤの異名とはしれ

世の中に眞理てふを尊とむは

みおやのひかりあればなりけり

大ミオヤの聖旨しなくば世の中に

眞理てふる法はあらじを

みひかりの照りわたりたる大を

たゞ大空とのみな思ひそ

はかなしやみおやのみむね此身にも

かゝると知らであだに暮しつ

何處にかひかりわたらぬくまやある

心して見よ御名を唱へて

内と外に充ちわたりたるみひかりを

己が心の奥に求めよ

大みむねにまかせぬる身のつとめをば

みおやのもとにすゝみゆくなり

六の度よろづの徳もことごとく

みむねにまかすつとめなりけり

月も日も西にゆくへをのりとして

ならばゞやがて涅槃にぞ入る

明ぬれば今日もおほせのつとめをば

果さむものといさみすゝまぬ

天地のよろづはなべて大ミオヤの

大みはからひになるにぞありける

賜の時のたからをいたづらに

費すひとの淺ましきかな

賜の時のたからをたからとし

つとめてこそはたかららとるなれ

わが物と思へばあだに過しなん

賜なりし此の命をば

天地のよろづの物を備へては

いのちを賜ふミオヤとぞしれ

かぎりなき備へによりて活さるゝ

いのちとおもひあだになくらしそ

大ミオヤはいかなるみむねのましまして

われをいかすとさとりみよかし

人生てふまたなき此身うけながら

あだに暮すは愚ならずや

かぎりなき大恩寵に報いむと

おもふつとめのいさましきかな

心てふこの不可思議の物を見よ

まことのミオヤならましかは

大ミオヤをミオヤとおもひまごゝろに

御名よぶかとのなつかしきかな

罪といふ罪多けれど大ミオヤに

そむくが罪の本にぞありける

大ミオヤの聖旨にそむく心より

すべての罪はつくるなりけれ

のちの世は聖旨のまゝにまかせてん

今日のつとめを我は果さむ

後の世と此世とへだてあればとて

たゞ大ミオヤのみひかりのなか

人はみなもと同胞といふものゝ

ミオヤをしらぬ人ぞ多かる

似せものゝ形ばかりを我と思ひ

まことの我をしる人もなし

かぎりなきいのちのおやともろともに

不生不滅のみやこにぞすむ

天地はよしわづかにもあればあれ

我はミオヤと無量壽にして

なつかしき我同胞にわがちたし

とはに輝く此のみひかりを

たらちねの御手をはなれてみどり子の

成長なるべきみちやなからん

はてもなく六のちまたにさまよひし

みおやをたのむ心なきにぞ

いさみつゝ今日のとめを果さなむ

我大ミオヤのおほせなりせば

大ミオヤのおほせのまゝに果すより

外になすべき事もなからむ

大ミオヤのみむねのまゝにまかせなば

つひには海に流れ入るなれ

夫れから又大正四年四月廿日より、元祖上人様の七百年御遠忌に付、辨榮上人へ何か御願申さうと云ふ相談に相成り、早速御尋ね申上げし、其の御尊書に、

「此の程の御手紙の返事、それから〳〵へ参りて、大いに延引に相成候。御遠忌の寄附の事は承知致し候。それでも自分の主義は活きた法然上人の意志をつぎて、大ミオヤの光明によりて、今の世の中の心が闇黒に迷ふてゐる人々を明るい光明の中に入れて、而して肉にばかり生きて居て、靈に死して居る人を心靈に復活させて、此世から大ミオヤの中に、日暮しが出来る様に致してやりたいのが目的である。明照大師なんて名前許りが立派でも死んでからの御祭りは實は大嫌ひである。自分なんかもう體は四大のかり物だけれども、心靈は今から大ミオヤの大光明中に活かされて居るのであるから、體がぬければ直に蓮華藏世界であるから、ぬげがらのあとはどうでもよいので

後の人もそんな馬鹿な事に騒がずして、活きた心霊の日らしに導くことにとめてくれ、ばそれが満足である。法然上人だとして、御思召は同じ事である。御祭り騒ぎして居る馬鹿者の爲に、法然の徳が　　すると思へば、悲んで御いでだらう。」

又他人に餘り金の爲に困り窮られし人ありし故、暫く御取替を願上度しと申上候御返書に、

「次に他の金の事てつきては外に何とかかたをつけるが宜からうと思ふ。宗教家は貸借と云ふ事は釋迦規則で出来ぬから、左様思ふて呉れ」

又其の後の御葉書に、

「其の後如何に候哉。何は免まれ世の中は悦びも悲しみもこれ夢のほどなれば、如何なる事もみな娑婆の習、種々の艱難困苦と戦ふて最後の勝利は如來の大慈悲光明の加はる人之ありて、如何なる場合にも魔はしきをかへざる様に、如來の御力の加はる様に常に稱名せられん事を(後略)。」

其後大正九年三月祖山の御別時の御歸りに宗祖の秘髓を御惠與下され日々拜讀申しありがたく尊く感謝致し居り、南無阿彌陀佛〳〵活動致し居しに、あまり活動致し過ぎた都合か、或は時候の都合でしたか、脇を悪くしたる時、本誓寺様へ御手紙にて、辨隆尼病氣の由御世話に相成り、ありがたし。東京より藥を送附下さる様御願申し候故、着致し候はゞ本人に與へ下されとの御手紙にて、早速頂戴致し夫れより追々眠れる様に相成り、誠にありがたき次第にて、心の病氣も體の病氣も、皆私は御上人様の御蔭にて、今日ありがたく楽しく、平和と愉快とにて、大ミオヤ様と共に生活出来得る身になさして頂き申した事、實に御慈悲の深き事感謝に堪えず、日々修養致しと、度々御尊書拜讀申し、萬分の一たりとも實行致し、御恩を報謝申し度しと、南無阿彌陀佛々々々々々と大ミオヤ様に御育てに預り居候。

(以上)

× × × × × × × ×

光明學園地鎮祭祈願文

南無阿彌陀佛

法身報身應身の聖き御名に歸命し奉る熟々惟ふに如來のみ力とみめぐみとに依りて生き働らきあることを得たる我等は光明主義の念佛首唱の恩祖辨榮聖者御遺業の一なる光明學園開設滿八ヶ年に垂んとするの間以て今日に至る経路は一に如來の知ろしめす處また聖者の知めし給ふ處幸にして今回職員諸士はじめ關係者の微衷を認められ地方有志の應援と東京方面及び帝國各地光明會有志諸賢の後援多大の助力を仰ぎ校舎設立の議熟し茲に恭しく地鎮の祭事を行ふに至りしは獨り學園の満足たるのみにあらず引ては忠良の人潔をも養成し得べきは誠に國家の大慶事なる伏して思ふに故聖人の尊慮は如來の聖旨を奉體して佛念ひの孝子所謂萬事みな念佛心より現はれたる大菩薩的國民養成にありき偶々故人御七周年の忌辰に當り謹みて此の擧を成すに至りしも是偏に如來照鑑の恩寵を蒙むればなり不肖闈長敢て不遜を願みす普ねき後援有志諸賢を代表す仰ぎ希くは未來際を盡してとこしへにみさかへあらしめ給はん事を祈り奉る

南無阿彌陀佛

大正十五年八月廿七日

光明學園長 平野 開 榮

大正十五年九月廿三日印刷
同 廿五日發行

誌代年七冊一圓二十錢(郵税共)
年十二冊二圓(郵税共)

編輯兼 山崎 辨 成
發行人

東京市小石川區茗荷谷町九八
印刷人 小林 七 太郎

發行所

東京市小石川區水道橋二ノ四四
ミオヤのひかり社
振替東京六六八五一番